

ヴィシュヴァンタラ王子物語

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第23章——

引 田 弘 道

大学院の授業で *Jātakamālā* を輪読した際、ヴィシュヴァンタラ王子の布施の物語に出会った。その中でも、布施をする相手のバラモンの手に水瓶から、水をかけるシーンに強烈な印象を受けた。ちょうど学生の一人から、ペシャワール美術館長 *Sehrai* の研究書には象の布施をする際に水を注ぐ浮き彫りの姿の写真があると紹介された。またタイやミャンマーではこの物語が今でも有名であると報告されている。¹⁾

1. ヴィシュヴァンタラ王子の物語を説く文献

ヴィシュヴァンタラ王子の物語に関する研究は辛島静志博士の訳「布施太子前世物語」の補注（辛島博士と中村博士）に詳細に紹介されている²⁾。それをもとにサンスクリット語文献、パーリ語文献、漢訳文献の順に主要な文献を列挙する。

サンスクリット語文献

- ① *Viśvaṃtarāvadāna, Bodhisattvāvadānakalpalatā*, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga, 1959 (Buddhist Sanskrit Texts 22-3), Vol. 1, pp. 172-175 (= BAK).

なお、今回の和訳に際しては Gupta (1978) を参照した。これは学位論文であり、閲覧が困難であったが、辛島博士の御厚意により参照することが出来た。

- ② *Viśvantarāvadāna, Ārya Śūra, Jātakamālā*, edited by H. Kern, Harvard Oriental Series, Cambridge, Mass, 1891, pp. 51-67 (= JM).

これには J. S. Speyer の英訳がある。J. S. Speyer, *The Jātakamālā or Garland of Birth Stories of Ārya Śūra, Sacred Books of Buddhists*, Delhi: Motilal Banarsidass, (1895) MLBD reprint, 1971, pp. 71-93. 日本語訳としては「第九章 ヴィシュヴァンタラ太子本生」干潟龍祥・高原信一訳『インド古典叢書 ジャータカ・マラー（本生談の花鬘）』講談社、1990年、83-107頁がある。

- ③ 根本説一切有部の資料として、“The Story of Viśvantara (concerning a previous birth of Devadatta)”, *The Gilgit Manuscript of the Saṅgahedavastu, being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Part 1-11, ed. by R. Gnoli with the Assistance of T. Venkatacharya, Rome 1977-78 (Serie Orientale Rome XLIX, 1-2), Part II, 119-133. (= SBV)

パーリ語文献

- ① *Vessantarajātaka, The Jātaka* (edited by V. Fausbøll, Vol. 6, pp. 479-596) (= VJ).

- ② *Vessantaracariyaṃ, Cariyāpiṭaka (Buddhavaṃsa and Cariyāpiṭaka, New Edition, by N. A. Jayawickrama, PTS, 1974, pp. 7-11).* (= Cp) これに註釈がある。Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā (*Paramatthadīpanī*, ed. by D. L. Barua, PTS, 1939, pp. 74-102).

漢訳文献

- ① 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻16（大正24, 181a-184b）（＝破僧事）。これはサンスクリット③に対応する。ただし王の名前は「自在友」、太子の名前は「自在」となっている。
 - ② 『根本説一切有部毘奈耶棄事』巻14（大正24, 64c-68b）（＝棄事）。父王の名前は「尾施縛蜜多」、王子の名前は「尾施縛多羅」とあり、それぞれ Viśvāmitra, Viśvantara に対応する。
- いっぽう、太子の名前を「須大怒拏」とする経典がある。
- ③ 『太子須大怒拏経』巻14（大正3, 418c-424a）（＝太子）。
 - ④ 『六度集経』巻2（大正3, 7c-11a）（＝六度1）。これも③と同じく「須大怒拏経」の名を冠する。この「須大怒拏太子」の名前は『大智度論』巻12（大正25, 146b）や『菩薩本行経』巻下（大正3, 119b）にも認められる。
- その他、太子の名前を出さず簡略に本物語に類似するものとして、
- ⑤ 『六度集経』巻1（大正3, 2c-3b）（＝六度2）。

2. 物語の内容

括弧内は偈の番号を表す。

- ① 開経偈（1）
- ② ヱィシュヴァアの都、サンジャヤ王とヱィシュヴァンタラ王子（2-7）
- ③ 王子は戦車と象を布施して都を追放される。（8-26）
- ④ 王子は追放され家族と共に森に出発、途中荷車などを布施する。（27-29）
- ⑤ 王子は息子ジャーリンと娘クリシュナーをバラモンのジャンプカに布施する。（30-33）
- ⑥ 妻マードリーの悲嘆（34-36）
- ⑦ 王子は妻をバラモンの姿をしたインドラ神に布施する。（37-43）
- ⑧ インドラ神は妻の前に自らの姿を現す。（44-47）
- ⑨ ヱィシュヴァーミトラ王は王子の二人の子供を買い戻す。（48-49）
- ⑩ 王の死後、ヱィシュヴァンタラ王子は王位に就く。（50-52）
- ⑪ 過去世の物語と現世との接合。（53）

3. 布施の約束として相手の手に水をかける儀礼。

ところでこの物語の中に興味深い儀礼が認められる。それは象、二人の息子、妻の布施の時に、相手の手に水瓶を掲げて水をかけるという儀礼である。これは布施を確実なものにする行為であり、当時の社会的慣習として一般的であったと推察される。このことは既に辛島（1988: 294, 注496）で、「古代インドの慣習では財産を贈与するとき、相手の手に水を注いで、その贈与が真実であることを示したものである」と指摘されている。Sehrai (22) にも指摘されている。このペシャワール博物館に保存されている浮彫には、象を布施するさい、王子がバラモンの手に瓶から水を注ぐシーンが施されている。そこで重複するが、再度この問題を扱ってみたい。この内容は BAK, SBV には明らかではないが、JM や VJ にははっきりと認められる。即ち、

第1に象をバラモンに布施するとき、

iti viniścītya sa mahātmā tvaritam avatīrya dviradavarāt pratigṛhyatām iti samudyata-kāñcanabhṛṅgāras teṣāṃ purastād avatasthe // (JM p. 53, ll. 19-20)

このように決心すると、その大士は急いで立派な象から降りて、「受納しなさい」と言って、黄金の水瓶を掲げて、彼らの前に立った。

ここでは水瓶からの水の流れはなく、ただ「黄金の水瓶」(kāñcanabhṛṅgāra) が布施のさいに必要なだと

記されているだけである。

一方、Cp (p. 8, No. 20) では、

nāgaṃ gahetvā soṇḍāya bhīṅkāre ratanāmaye /
jalaṃ hatthe ākiritvā brāhmaṇānaṃ adaṃ gajaṃ //

象の鼻先をつかんで、宝石でできた水差しの水をバラモンたちの手に注いで、（彼らに）私は象を布施した。

『太子』（419c）にも、「太子左手持水澡道士手。右手牽象以授与之。」とある。『六度1』（8a）では「左持象勒，右持金甕。澡梵志手。」と右左が逆になっている。また受け取った梵志は大いに喜んで呪願を行う。

第2に二人の子供をバラモンに布施するとき、

atha bodhisattvo yatheṣṭam idānīm ity aparisaṃāptārtham uktvā sānunayam anuśiṣya tanayau paricaryānukūlye pratigrahārtham abhiprasārite brāhmaṇasya pāṇau kamaṇḍalum āvarjayāmāsa /
tasya yatnānurodhena papātāmbu kamaṇḍaloḥ /

padmapatrabhītāmbrābhyāṃ netrābhyāṃ svayam eva tu // (63) (JM p. 62, ll. 7-11)

さて菩薩は「好みのままに今、」という完結していない意味のことを言って、愛情を抱いて二人の子供を（召使いとして）奉仕に相應しいものへと教えながら、受納のために差し出したバラモンの手に水瓶を傾けた。

彼の努力に一致して、水瓶から水が流れ落ちた。

赤蓮華の花弁のような赤い両目からは、自ずと（涙が流れ出た）。

ここでは明らかに水瓶（kamaṇḍalu）を傾けて相手の手に水を灌ぐと記される。

また VJ でも、

…kamaṇḍalunā udakaṃ gahetvā “ehi vata bho brāhmaṇā”ti sabbaññutañāṇassa patthanam katvā udakaṃ pātetvā… (p. 547, ll. 8-10)

水瓶から水を取って、「さあ、バラモンよ」と言って、一切智者の智慧への願いをこめて、水を注いで、

とある。さらに、Cp (p. 10, No. 50) でも、

Maddiṃ hatthe gahetvāna udakañjali pūriya /
pasannamanasāṅkappo tassa Maddim-adās’ ahaṃ //

マッディの手を取ると、（バラモンの）掌に水を満たして、

清浄な心の意向をもって、私は彼にマッディを与えた。

『太子』（422a）にも、「太子即以水，澡婆羅門手。牽兩兒授与之。」とある。『六度1』（9c）では「右手沃澡，左手持兒，授彼梵志。」と右左の役割がはっきりしている。

第3の妻の布施の箇所でも水の流れが記されている。

avimaṇā eva tu bodhisattvas tathety asmai pratiśuśrāva /
tataḥ sa vāmena kareṇa madrīm ādāya savyena kamaṇḍalum ca /
nyapātayat tasya jalaṃ karāgre manobhuvaś cetasi śokavahnim // (93) (JM p. 66, ll. 17-19)

菩薩は実に取り乱すことなく「分かった」と言って（妻の布施を）約束した。

それから左手にマドリー妃を、そして右手に水瓶をもって、

彼の手の先に水を灌いだ。愛の神の心には悲しみの火を（注いだ）。

SBV (p. 131) には「マドリーの手を取って」（madrīm pāṇau grhītvā）とだけしか記されていないが、対応する『破僧事』（183c）には「是時菩薩即以一手執曼低離，以一手執持澡罐。」と、一方の手に布施する

妻を握り、もう一方の手に水瓶を持ってとある。『薬事』(56c)には、「即手持妻」とだけある。同じく VJ にも同様の記述が認められる。

Evañ ca pana vatvā sīgham eva kamaṇḍalunā udakaṃ āharitvā udakaṃ hatthe pāṭetvā bhariyaṃ brāhmaṇassa adāsi, (p. 570, ll. 4-5)

このように言うと、速やかに水瓶から水を取り出し、手に注いで妻をバラモンに布施した。『太子』(423a)にも、「太子以水，澡婆羅門手。牽妃与之。」とある。『六度 1』(10b)では「以右手持水，澡梵志手。左手提妻，適欲授之。」

以上より、若干の違いはあるものの、共通して言えることは、布施により所有権の移転を伴う場合、それを瑕疵のない、確実なものとするために、右手に水瓶を持ち、左手に移転する所有物をもって、移転先であるバラモンの手に水を注ぐことである。

4. 従順な妻

この物語に限らず、他の物語でも頻出するのは妻の夫に対する従順さである。妻は心の動揺や悲しみを打ち払って、夫の決断に従っている。花や果実を得るためにマードリーが出かけたとき、ヴィシュヴァントラ王子はバラモンに最愛の二人の子供を布施する。妻マードリーは家に帰ると、二人の子供が布施されたのを知り、悶絶に襲われて倒れる。彼女の心は苦しみの火で焼かれたが、愛する夫への愛情によって、火は燃え盛ることはなかった。さらに、王子が妻自身を布施すると、彼女は雌鹿のように、突然の自身の布施で震え、恐れおののいたが、王子の布施の決意を聞くと、あえて反対することなく夫の決断に従っている。

この妻の態度は他の文献でさらに強調されている。例えば VJ では二人の子供を布施した王子にたいし、妻マッディーは言う。

王様、子供たちは最高の施物だと私は貴方様とともに喜びます。

布施して心を明るくして下さい。もっと布施する人であってください。³⁾

同様に JM でも布施した夫を励まして、

それ故、悲しみや落胆はおやめください。布施した以上は心を明るくして下さい。世間の人たちの水飲み場となってください。再び同じ布施者であってください。⁴⁾

また『薬事』(67c)にも、夫が二人の子供を布施したと知った妻が、夫の決定に従うことを次のように述べている。

我無障礙意 莫生於異心

若欲将我施 随意勿生疑

割愛捨親眷 至願求菩提

所求願滿足 拔濟救群迷

さらにマッディー自身を布施したときにも、彼女は王子に、

少女である私が妻となったその人は私の主人であり、支配者です。

貴方様が望む人誰であれ、その人に私を与えても、売っても、殺すこともできます。⁵⁾

いっぽう JM では彼女の苦悩も表現している。

マドリーは怒ることもなく、泣くこともなかった。というのも彼女は彼の本性を知っていたからである。しかし今までにない苦しみの重荷に悩んで、彼を見ながら、彼女は描かれたかのように立っていた。⁶⁾

略 語 表

de Jong

1996: “Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā, Pallavas 7-9 and 11-41” 『法華文化研究』（立正大学法華文化研究所），1-93 頁。

Gupta, K. Das,

1978: *Viśvantarāvadāna. Eine buddhistische Legende. Edition eines Textes auf Sanskrit und auf Tibetisch. Eingeleitet und übersetzt*, Berlin.

辛島静志

1988: 「布施太子前世物語」『ジャータカ全集 10』春秋社，149-257 頁。

佐々木教悟

1986: 『インド・東南アジア仏教研究 II 上座部仏教』平楽寺書店。

Sehrai, Fidaullah,

The Buddha Story in Peshawar Museum, Peshawar.

和 訳

息子や妻を布施する人への賞賛

愛しい息子や妻などを他人に与えても、衆生の求めに対して困った心を表すような顔の翳りのない人たち、

彼らは如意宝珠に増して輝きを放ち、あらゆる世界で非難されるべきでなく、今までにない威光をもった、宝石のような人たちなので他者によって敬礼されるべきである。(1)⁷⁾

ヴィシュヴァの都とヴィシュヴァンタラ王子

以前、釈迦族の都で勝者、世尊は比丘たちに質問されると、デーヴァダッタの (Devadatta-) 話に関連して、前世の出来事を語られた。(2)⁸⁾

昔、ヴィシュヴァ (Viśva) という名前の都があった⁹⁾。これは幸運の女神が (Śrī) 安心して (viśvāsa-) 住む場所であった。ちょうどあらゆる人への (viśva-) 奉仕に専念する善行の (sukṛtasya) 誕生の場所である (janmabhūh) かのものであった。(3)

その (都) にサンジャヤという (Samjaya-) 名前の王がいた¹⁰⁾。彼は暗黒のような敵に対する太陽であり (-amṣumān), 眼に喜び (をもらす) 月であり (-sudhāsūtir), 素晴らしい行為者であった。(4)

彼 (の王) にヴィシュヴァンタラ (Viśvaṃtara) という名前の¹¹⁾ 寛大な王子がいた。今までにないほど捨施する (-tyāginā) 彼によって如意樹の名声が奪われるほどであった。(5)

賢明な彼の真実語 (satyena), 布施, 多聞によって, (それぞれ) 言葉の神パーラティー (Bhārātī), (富の女神) シュリー女神 (Śrī), そして賢明 (Dhī) は等しく嫉妬心のない状態となった。(6)

今日でもまた、彼の名声は天空の処女の方角の耳飾りの状態となり、ケートキー花の内側やパラージャ花のように輝いている。(7)

王子、戦車を布施

彼はあるとき、神のような宝石の飾りがあり、その輝きによって、勝利によって (得られる) 帝国という望みを (-manoratha-) もたらす戦車を (ratham)¹²⁾、物を乞う者に布施した。¹³⁾ (8)

その素晴らしい戦車が布施されると、あらゆる人たちは驚きで心が一杯になり、王は心配で (cintayā) (心が一杯に) になった。(9)

王は喜びがなくなり、蓄積した不安と心配に心が (-manorathah)¹⁴⁾とりつかれて、大臣たちを招集して言った。(10)

「王子によって布施された戦車は敵を粉碎し、勝利をもたらすものだ。というのも、その(=戦車の)威力によって得られた我がこの幸運の女神は (Lakṣmīḥ) 大戦車を具えた軍隊をもたらし、楽々と座って、その太陽の道を走る (sauryapathe)¹⁵⁾戦車や勝利の休息所たる象の上にじっとした状態となっている。」(11-12)

大臣たちの諫言

以上の王の言葉を聞くと、彼に大臣たちは言った。

「王さま、これは他ならぬ貴方様の過失です。愛情による不注意¹⁶⁾からです。(13)

正義が誰にとって喜びにならないでしょう。布施は誰にとって賞賛されることがありましょう。しかしながら、果実を求める者は、根が切られた木からはそっぽを向いてしまうものです。(14)

戦車はそのバラモンによって他の土地で売られているでしょう。」

このように言って大臣たちはすべて矢に射ぬかれたかのようにになった。(15)

春の到来

さて、しばらくして愛の神の祭りである (madanotsava) 春が到来した。(それは) 心の喜びをもたらす機会であり、まるで善行が (sukṛtasya) 果を結んだかのようにであった。(16)

勝手に自然の恵みを取ってもよい¹⁷⁾、蜜蜂を求める春に、世界は多くの花のせいで真っ白な状態になった¹⁸⁾。世間の人が名声のせいで清浄な状態になったように。(17)

春が (madhau) 至ると、蕾で飾られた¹⁹⁾世界はアショークの樹に世間の人に良き木陰を提供させ、今にも種々の奉仕をさせるようにした。(18)²⁰⁾

王子、象を布施

王子はラージャヴァルダナ (Rājavarḍhanam) という²¹⁾象に乗ると、物を乞う者にとっての物惜しみのない如意樹のようである (arhi-kalpātarus) (王子は) 森で満開の木々を見に出かけた。(19)

彼が道を進んでいると、敵に雇われた²²⁾バラモンたちが近づき、吉祥の挨拶 (svastivāda-) の後話しかけた。(20)

「あなた様是世界で賞賛されるべき、歩く如意宝珠 (cintāmaṇir) だと讃えられています。というのも (あなた様) を見ると、物を乞う者は幸運の女神に強く抱きしめられるからです。(21)

良き生まれであって (bhadrajanmani), 有名な卓越した素晴らしきものはこの世で二つしかありません。つまり布施に濡れた (-ārdra-) 手をもつ貴方様と、確実に繁栄をもたらす象です。(22)

善行で気高きお方よ、私どもにこの象をお与えください。あなた様より他の (どんな) 寛大な人によっても、この (象を) 布施することは出来ません。」(23)

このように彼らによって請われると、彼は決然として彼らに象を布施した。(その象は) 生命をもった覇権 (sāmrājyam) のようであり、ほら貝・旗・払子を²³⁾備えていた。(24)

悟りを主とする誓願をもって²⁴⁾清浄な考えをした彼は、宝石のような戦車と象を布施すると、歓喜で一杯になった。(25)

名の知れた、勝利をもたらす象が布施されたと聞くや否や、王は王の幸運が (rājalakṣmīm) 防御の城壁

が欠けたようになってしまった。(26)

王子、追放され家族と共に森に出発

王権の崩壊を恐れ、怒った王によって彼の王子は追放された²⁵⁾。(王子は)彼の(王に)挨拶すると出発した。²⁶⁾(27)

マードリーという(Mādrī)²⁷⁾妻と共に、彼はジャーリン(Jālin)という息子とクリシュナー(Kṛṣṇā-)という名前の娘を連れて²⁸⁾森²⁹⁾に向かった。(28)

森で彼は荷車(vāhana-)などの残りを³⁰⁾物を乞う人に布施した。というのも偉大な人たちの心は(sattvaṃ) 繁栄にも貧乏にも等しいから。(29)

王子、息子と娘とを布施

あるとき、花や果実を得るためにマードリーが出かけたとき、とあるバラモンが王子に近づいて言った。(30)

「大士よ、賢いご子息とご令嬢とを召使がいらない私に布施して下さい³¹⁾。あなた様はあらゆる物を布施することで(sarvado)有名です。」(31)

これを聞くと、全く躊躇することなく、最愛の二人の子供を彼に布施し³²⁾、彼(の王子は)突然彼らとの別離の悲しみを忍受した(sehe)。(32)

財産・子供・妻などはこの世で誰にとって愛しくないことがあろうか。気前よく、慈悲深い人たちにとって布施より他に愛しいものがあるか。(33)

妻マードリーの悲嘆

さて、マードリーは家に帰り、子供を愛しているが、二人の子供を見つけられなくて、夫の目の前で悶絶に襲われて³³⁾倒れた。(34)

彼女は意識を取り戻すと、燃え盛る悲しみの火で満たされた。子供を布施した出来事を聞くや否や(彼女は)歎き悲しんだ。(35)

彼女の心の中では、苦しみの火が子供への愛情のために耐えがたいほどであったが、愛する者(=夫)への愛情によって、(苦しみの火は)蒸された状態と(putapākatām)なった。(36)

王子、妻を布施

その間、神の主はバラモンの姿をして近付くと、召使を求めて愛する妻を王子に乞うた。(37)

突然彼によって乞われると、善性の海である(sattvābdhiḥ)彼は妻との別離より生じた悲しみを理性で(dhiyā)制御して(saṃstabhya)、彼の(バラモンに)彼女を渡した³⁴⁾。(38)

まるで雌鹿のように、突然の(自身の)布施で震え、恐れおののいた妻に、彼は心の内に悟りへの意向を(bodhivāsanām)抱きながら言った。(39)

「良き女性よ(kalyāṇi)、元気を出しなさい。汝は悲しむべきではありません。この愛する者との結びつきは、夢での愛情のように実在するものではありません。(40)

このバラモンに奉仕することによって、汝の心はダルマを楽しみなさい。不安定な世事にあってダルマは良き人たちにとって確固とした友です。」(41)

あらゆる親戚という良き人たちが知られ、縁者が享受され、喉にはすぐに芳香が消えてしまう、友という花輪が掛けられている。

(しかし)妻や息子には絶えず若さや命は過ぎてしまう。ダルマ以外に、信頼でき確固とした知り合い

は誰も得られることはない。」(42)³⁵⁾

このように妻に言うと、貪欲を捨て去っているがゆえに、彼は蓮華のような顔に輝きを持ち、心に落ち着きを抱いた。(43)³⁶⁾

インドラ神、妻の前に自らの姿を現す

シャチーの夫（＝インドラ神）はマードリーが別離の悲しみに打ち沈んでいるのを見ると、慈しみの心でいっぱいになって、自身の姿をとると、彼女に言った。(44)

「娘よ、決してうち悲しんではいけない。私は神、三十三天の主（Tridaśeśvaraḥ）である。この者が物を乞う者たちに汝を布施しようとしている。だから汝は私によって乞われたのだ。(45)

私が手に入れた、他ならぬ汝は今夫に信託されることになる。この者は汝を³⁷⁾他人に布施（すべきでない）。どうして他人の財産が布施されようか。³⁸⁾(46)

私は必ず汝を二人の子供と再会させてやろう。」³⁹⁾このように言うと、千の目を持つ（＝インドラ神）は（Sahasrākṣaḥ）突然姿を消した（antaradhīyata）。(47)

ヴィシュヴァーミトラ王、王子の二人の子供を買い戻す

さてバラモンはお金を得ようと願って、二人の子供を連れて、ヴィシュヴァーミトラの都へ（Viśvāmitrapuram）行くと、貪欲さから（二人を）売ろうとした。(48)

ヴィシュヴァーミトラは二人の子供が王子の（子供）だと判別すると、涙で目が曇ったが、多くの金をもって（二人を）取り戻した⁴⁰⁾。(49)

ヴィシュヴァンタラ王子、王位に就く

しばらくしてヴィシュヴァーミトラ大王が天に昇ると、ヴィシュヴァンタラは都の住人や大臣たちによって請われて王国を享受した⁴¹⁾。(50)

彼は世俗の欲がなく、大変布施に熱中していたので、（彼の）威徳によって（sattvena）王国には繁栄が（-ṛddhir）増大し⁴²⁾、誰も物を乞う者は（yācako）いなくなった。(51)

彼のバラモン、ジャンブカは（Jambukaḥ）⁴³⁾、彼の（ヴィシュヴァーミトラ）の財宝で興隆したのに、恩知らずの（kṛtaghnaḥ）⁴⁴⁾彼は「自らの力で私に繁栄が（生じた）」と人々に言って回った。(52)

過去世の物語と現在との接合

「他ならぬ彼のヴィシュヴァンタラは私であり、デーヴァダッタは彼のバラモンである。」と言って、世尊は比丘たちに法の説示を（dharmadeśanām）行った。(53)

布施は何百という穴に落下する際の抛り所であり、恐ろしい暗黒での長い間の光明であり、耐えがたい苦しみの時での慰めであり、人々にとって他界での親戚である。(54)⁴⁵⁾

註

1) 佐々木（1986: 248-49）

2) 辛島（1988: 308-317）

3) anumodāmi te deva, puttake dānam uttamam /
datvā cittam pasādehi, bhiyyo dānadado bhava // (p. 567, No. 2290)

4) tad alam śokadainyena dattvā cittam prasādaya /
nipānabhūto lokānām dātaiva ca punar bhava // (JM No. 91)

5) komārī yassāham bhariyā sāmiko mama issaro /

- yass' icche tassa maṃ dajjā vikkiṇeyya haneyya vā ti // (p. 570, No. 2312)
- 6) cukopa madrī na tu no ruroda viveda sā tasya hi taṃ svabhāvam /
apūrvaduḥkḥātībharātūrā tu taṃ prekṣamāṇā likhiteva tasthau // (JM No. 94)
- 7) 韻律は Mandākṛāntā.
- 8) 第2偈から第41偈までの韻律は Anuṣṭubh.
- 9) SBV (p. 119) では Viśvapūrī という名前の王都 (rājadhānyāṃ) とある。『葉事』(64c) にも「尾施縛」とある。Cp (p. 7, No. 7) には「ジェートウッタラ」(Jetuttara) とある。
- 10) 後の48-50偈では王の名前はヴィシュヴァーミトラとなっている。SBV (p. 119) では最初からヴィシュヴァーミトラ王とある。『葉事』(64c) にも「尾施縛蜜多」とある。JM (p. 52, ll. 3-4) にはサンジャヤという名前のシビ族の王 (śibīnām rājā) とある。VJ (p. 480, ll. 7-9) では、シヴィ国の (Sivirattṭhe) ジェートウッタラの都に (Jetuttaranagare), シヴィ大王がいて (Sivimahārājā), その息子がサンジャヤであり、彼が年頃になるとマッダ国の王女 (Maddarājadhītaram), プサティーを (Phusatīṃ) 娶った、とある。
- 11) SBV (p. 119) に、この男児はヴィシュヴァーミトラ王の息子である。だからこの男児には「ヴィシュヴァンタラ」という名前があるべきだ (ayaṃ dārako viśvāmitrasya rājñāḥ putraḥ; tasmāt bhavatu dārakasya viśvantara iti nāma iti) という語源解釈がなされている。『葉事』(65a) も同じ。VJ (p. 485, No. 1700cd) では、「庶民の (vessa-) 街で生まれたので、それ故私はヴェッサンタラである。」(jāto 'mhi vessavīthiyaṃ, tasmā Vessantaro ahun ti //) という語源解釈がなされている。Cp (p. 7, No. 11) も同じ。
- 12) SBV (p. 120) では、このときの布施を乞う者は次のように戦車をねだったとある。「あなた様はこの世のあらゆる人たちの中で何でも布施されるということでご有名だそうです。この戦車という施物をバラモンらにお与えください。」(sarveṣu khalu lokeṣu viśrutaḥ sarvado bhavān / ratham etad dvijātibhyo dānam tvaṃ dātum arhasi //)
- 13) SBV (p. 120) では、王子が布施する際の誓いの言葉として、「最大の喜びをもって私がバラモンたちに戦車を捨施したように、私は三有を捨てて最高の悟りに触れますように。」(yathā mayā rathas tyakto viprebhyaḥ parayā mayā / tathāham tribhavaṃ tyaktvā sprṣeyam bodhim uttamāṃ //) とある。『破僧事』(181b) にも「我今捨宝車 喜施婆羅門 願我捨三界 趣無上菩提」とある。
- 14) サンスクリット原典は「願い」を意味する manoratha であるが、ここでは第9偈にいう「心」の方が意味が通りやすい。
- 15) de Jong (1996: 56) は śaurypathe (勇敢さの道にある) と読むべきとする。
- 16) 原語は pramādyataḥ だが、意味が通じにくい。ここでは pramādataḥ と解釈した。
- 17) 原語の -upajīvyasya を、「自然の恵み」と解釈した。
- 18) de Jong (1996: 56) は loke puṣpavanair yāte と処格絶対節と読むべきだとする。
- 19) 原典では kalikālāṃ kṛtaṃ だが意味がとりにくい、ここでは Das (1978: 134) に従って kālīkālaṃkṛtaṃ と読んだ。SBV (p. 121) では「春の時期が到来し、木々が花を開くと」(saṃprāpte vasantakālasamayē, saṃpuṣpīteṣu pādapeṣu) とある。
- 20) de Jong (1996: 57) は原語 vidhūtaṃ の代わりに vidhātum (する為に) と読むべきだとする。ここでは彼の読みに従った。
- 21) SBV (p. 121) にも、「ラージャヴァルダナという名前の素晴らしい象に乗ると」(rājavaradhanam nāma gajavaram abhiruḥya) とある。『破僧事』(181b) に「王増長」とある。『六度1』(8a) にも「羅闍憍大檀」とある。VJ (p. 485, ll. 24-25) には、この象の名前が「パッチャヤ」(Paccayo tv-eva nāmaṃ karimṣu) とある。Cp (p. 8, No. 15) も同じ。『太子』(419b) には「須檀延」とある。
- 22) 原典では prati sāmanta- だが意味がとりにくい、ここでは Das (1978: 135) に従って ptatisāmanta- と読んだ。SBV (p. 121) には、「敵に雇われた」(pratyarthika-prayuktā) とはっきり記されている。『六度1』(8a), 『太子』(419c) ともに「怨家」とある。『葉事』(65b) では「外境怨国」とある。JM (p. 53, ll. 2-5) では、隣国のとある王が、ヴィシュヴァンタラが布施への愛着に捉われているから彼を騙すことが出来ると考えて、バラモンたちを派遣した、とある。VJ (p. 487, ll. 5-20) にはカリンガ国が早魃に見舞われ、王は7日間戒を保ったが雨は降らなかった。そこでヴェッサンタラの象は雨を降らすので、この象をもらい受けようと、王はバラモンたちを派遣した、とある。Cp (p. 8, No. 16) もカリンガ国のバラモン (Kālīngaratṭhavisayā brāhmaṇā) とある。
- 23) VJ (p. 490, No. 1718-1719) を参照。
- 24) SBV (p. 121) には、先の戦車の布施と同じ形式の誓いの言葉がある。即ち、

yathā mayā gajas tyakto viprebhyaḥ parayā mudā /

tahtāham tribhavam tyaktvā spṛśeyam bodhim uttamām //

25) 追放の期間は『六度1』(8b)で10年間、『太子』(420a)で12年間とある。

26) VJ (p. 494, ll.5-10) には、王子が追放される日「明日私は7百の大きな布施をしよう」(aḥam sve sattasatakam nāma dānaṃ dassāmi) と決心した、とある。『六度1』(8b), 『太子』(420b) には、王子が7日間布施をしてから出国する許可を王に願ったとある。

27) JM (p. 59, l. 8) では「マドリー」(Madrī), VJ (p. 486, ll. 26-27) では、マッダ王家から叔父の娘のマッディを迎えて (…Maddarājakulato mātuladhītaraṃ Maddiṃ nāma ānetvā…) とある。

28) JM (p. 59, ll. 21-22), SBV (p. 124) では、息子は「ジャーリン」(Jālin), 娘は「クリシュナージナー」(Kṛṣṇājīnā) とある。VJ (p. 486, l. 30-p. 487, l. 2) では、「やがて、王妃マッディーは男の子を産んだ。人々は彼を金の網で受け止めた。それ故彼にジャーリ童子と名付けた。」(Aparabhāge Maddī devī puttam vijāyī tam kañcanajālena paṭicchimsu, ten' assa Jālikumāro tv-eva nāmaṃ karimsu,) という語源解釈がある。さらに VJ (p. 487, ll. 2-4) には、黒の皮で (kañhājīnena) 女の子が産まれたとき受け止めたので、「クリシュナージナー」(黒の皮) と名付けられた、とある。『六度1』(9a) では耶利と鬬拏延とある。『太子』(421b) は、兄は7歳、妹は6歳と具体的な年齢をあげる。

29) JM (p. 55, No. 20) では「ヴァンカ山」(Vaṅka), VJ (p. 491, No. 1726) にも「ヴァンカ山」(Vaṃke) という具体的名前があがっている。ただ VJ (p. 518, No. 1936) には「ガンダマーダナ山」(Gandhamādāna) という別名も登場する。『六度1』(9a), 『太子』(420a-421b) には檀特山に柴草を屋根と為したとある。JM (p. 60, ll. 11-12) には、インドラ神の命令によりヴィシュヴァカルマンが自ら化作した快い概観をした、あらゆる季節に快い、人里離れた草ぶきの小屋に住んだ (viśvakarmaṇā śakrasaṃdeśāt svayam abhinirmitam manojñadarśanaṃ sarvartusukhāṃ tatra praviviktam paṇṣālām adhyāvasat/) とある。VJ (p. 518 No. 1943-1948) にも、ムチャリンダ (Mucalinda) という湖の北東に草庵 (paṇṣāla) を構えたとある。

30) JM (p. 59) でバラモンたちが車を引く (4頭の) 馬を所望し (brāhmaṇā rathavāhams turagān ayācanta, l. 2), さらに別の一人のバラモンが菩薩に立派な車自体も所望した (brāhmaṇaḥ samabhiḡamya bodhisattvaṃ rathavaram ayācata, l. 17), とある。SBV (p. 123) にも馬と車の布施 (tato bodhisattvas tam apy aśvaratham pareṇa harṣeṇa tasmai brāhmaṇāya datvā) の記述がある。VJ (p. 512, No. 1898, 1900) に4頭の馬 (haya) と車 (ratha) を布施した、とある。『六度1』(9a) には、自身の宝のような衣服や妻子の珠のような服、次に馬、さらに車を順次布施したとある。『太子』(420c) も同じ。

31) JM (p. 60, l. 20) には、このバラモンは妻によって召使を連れてくるように固く命じられた (patnyā paricārakānayanārtham samarpitadr̥ghasaṃdeśas), とある。

32) SBV (p. 126) に、布施した二人の子供に対して王子が言った言葉として、

putrakau

na me hṛdayam asnigdham nākr̥pā nāpi nairghṛṇam /

sarvalokahitārtham tu tyajāmi guṇadarśanaṃ //

apy evāham parām bodhim abhiḡamya śivāṃ svayam /

duḥkhāṇavagataṃ lokam tārayeyaṃ nirāśrayaḥ //

さらに SBV (p. 127) に、「悟りに心を向けて」(bodhau manaḥ praṇidhāya) とある。『破僧事』(183a) にも「子供汝 応知 我非不愛愍 為濟衆生苦 是故捨児身 以斯殊勝願 度苦海衆生 令得出迷津 同獲菩提果」とある。

33) de Jong (1996: 57) は原語 -āpanna- の代わりに -atyanta- (非常な) と読むべきだとする。

34) SBV (p. 131) では、このときの誓いの言葉として、

「これがこの森における私の最後の布施になるであろう。このマドリーを手放して私は無所有となろう。」

(idam asmin vane dānaṃ paścimaṃ me bhaviṣyati / mādriṃ cemāṃ parityajya bhaviṣyāmy aparigrahaḥ //)

35) 韻律は Mandākṛāntā。

36) 第43偈から第53偈までの韻律は Anuṣṭubh。

37) de Jong (1996: 57) は原語 tam (彼を) の代わりに tvām (汝を) と読むべきだとする。ここでは彼の読みに従った。

38) SBV (p. 132) では、「私はこのマドリーを使用人として汝に与えよう。汝以外の誰にも布施されるべきではない。(そうすると) 信託の瑕疵が非難されることになる。」(aḥam mādriṃ imāṃ tubhyaṃ dadāmi paricārikāṃ / na

- ca te kasyacid deyā nyāsadroho hi garhitāḥ //）とある。VJ (p. 568, ll. 25–27) にも「バラモンの姿をとって彼に近づき、マッディを乞うて、（布施）波羅蜜の極みを得させて、誰にも与えられないようにし、再び彼女をほかならぬ彼に与えて私は戻ろう。」（“...brāhmaṇavaṇṇena naṃ upasaṃkamitvā Maddiṃ yācitvā pāramikūṭaṃ gāhāpetvā kassaci avissajjiyaṃ katvā puna naṃ tass’ eva datvā āgamiṣāmi ti”）とある。
- 39) SBV (p. 132) では、インドラ神は妻に自身が神であることを告げ、妻の献身的行為に満足し、望みを叶えようと約束する。妻は二人の子供が召使の状態から解放されることを望む。VJ (p. 572, No. 2322) にも、8つの願い事を叶えよう（vare aṭṭha dadāmi te）とある。
- 40) VJ (p. 577, No. 2355) には、百の下男、百人の下女、百頭の牝牛、百頭の牡牛、百頭の象、金貨千枚が子供たちの賠償金（nikkayan）として与えよ、とある。さらに VJ (p. 577, ll. 23–25) では、彼は七層の楼閣や多くの従者も与えられた。その後多くの財を受け取ると、その楼閣に昇り、美味しい食事をとり大きな寝台に横たわった、とある。『六度1』(10c)、『太子』(423b) には、王はバラモンにいくらで子供たちを買い戻せるか尋ねたが、バラモンは黙っていた。そこで子供たちは「男の子は銀錢千枚、特牛百頭、女の子は銀錢2千、特牛2百頭」と言った、とある。
- 41) SBV (p. 133) では、ヴィシュヴァンタラ王子はサルヴァムダダ王（Sarvaṃdada）となった、とある。
- 42) VJ (p. 593, ll. 11–15) には、サッカが七宝の雨を（sattaratanavassaṃ）降らすと、偉大な人 [= ヴェッサンタラ] は「それぞれの人の家の前や後ろの場所に降った財産は彼らのものとせよ」（tesaṃ tesaṃ kulānaṃ purimacchimavatthusu “vaṭṭadhaṇaṃ tesaṃ yeva hotū” ’ti）といて与えさせた、とある。
- 43) SBV (p. 133) では、「ジュッジュカ」（Jujjuka）とある。VJ (p. 581, ll. 9–10) では、バラモンのジュージャカは過度の量食べて、消化できなくてその場で死んだ（Jūjako pi pamāṇāṭikkantaṃ bhuñjitvā jīrāpetuṃ asakkonto tatth’ eva kālam akāsi,）とある。
- 44) SBV (p. 133) では、tasmāt tarhi akṛtajñāḥ akṛtavedī とある。
- 45) 韻律は Indravajrā。